

計量心理学の未来に向けて

山本 倫生 (大阪大学大学院人間科学研究科)

近年、校務などで学会年会にもほとんど参加できておらず、このような原稿を執筆させていただくのは大変恐縮ですが、せっかくいただいた機会ですので、計量生物学に関連した話題についてお話をさせていただければと思います。多くの方が私のことをご存じないと思いますので、まずは私の経歴について簡単に説明させていただきます。なお、タイトルは誤字ではありません。

もともと臨床心理学を中心とした心理学全般に興味があったため、どのような学びが得られるのか明確にはわからないが面白そうな大阪大学人間科学部に入学しました。その後、学部 3 年生で研究室に配属される頃には犯罪心理学に興味を持ち、犯罪行動分析への計量的なアプローチを勉強しつつ、卒業論文では正則化法に基づく非線形因子分析モデルの開発に取り組みました。この時期に、数理的な考え方が自分に合っていると感じるようになり、統計学の方法論の研究に楽しさを覚え始めていました。

その後、同大学大学院人間科学研究科の博士前期課程に進学し、行動科学や社会科学で利用される統計手法を研究する傍ら、当時大阪大学に所属されていた濱崎俊光先生、寒水孝司先生、杉本知之先生による医学統計学の授業を履修しました。この授業は私にとって大きな転機となり、統計専門家が医学研究に深く関与している様子を知ったことで、これまでの統計学の方法論研究者に対するイメージが一変しました。

結局、この授業を履修したことがきっかけとなり、博士前期課程修了後は製薬企業において医学統計専門家としてのキャリアをスタートさせました。製薬企業では、医薬品開発に従事する貴重な経験を積むことができ、当時お世話になった方々には今でも（密かに）感謝しています。ただ、研究の楽しさが忘れられず、職を辞した後は、大阪大学大学院基礎工学研究科の博士後期課程に進学し、因子分析や関数データ解析手法の開発についての数理的な研究を行っておりました。

博士号取得後はポスドクとして半年ほど自由を謳歌した後に、縁あって京都大学医学部附属病院に採用され、臨床試験や疫学研究における統計解析担当者としての業務に従事することとなりました。最初は企業での経験とは異なる振る舞いが求められることに戸惑いましたが、上司であった森田智視先生をはじめと多くの先生方のご指導のおかげで何とか業務をこなしておりました。この京都大学での経験は、実証科学の研究者との共同研究を行う際の、私の取り組み方の基礎を築いてくれました。その後、岡山大学環境理工学部で数理の教員としての経験を積んだのち、2 年前に大阪大学大学院人間科学研究科に着任し、現在に至っております。

さて、現在の所属先では、医学・疫学分野での研究活動に加え、計量心理学の専門家として教育や研究に取り組んでおります。そもそも計量心理学とはどのような学問かご存じない方も多いかもしれません。日本計量生物学会の設立趣意書では、計量生物学を「生物学や医学、環境科学などの諸分野で計量的・数学的・統計的手法を用いる学問」としています。一方、計量心理学は心理学分野で同様の手法を用いる学問です。両者は「測る」対象が異なるだけで、手法の数学的な部分の多くは共通しています。

計量心理学の専門家として活動する中で、計量生物学の環境の充実ぶりに感心させられることが多々あります。特に、人材育成に関して、近年では AMED の生物統計家人材育成推進事業などを通じて、多

くの生物統計家が育成されています。また、理工系の学部や研究科で医学統計学を学べる場が充実している点も素晴らしいと思います。

一方で、計量心理学ではどうでしょうか。国内において計量心理学、特にその数理的な方法論を専門とする研究室は、私が観測している範囲ではごく少数であると思います。医学分野では諸先生方のご尽力により、統計専門家が各大学病院や理工系の研究室に存在している一方で、心理学分野ではいまだに「レアキャラ」のままです。この状況は、2000年代後半に心理学分野で再現性の危機が指摘され、研究内での統計的な厳密な検証の重要性が高まる中でもあまり変化はなかったように思います。

計量心理学の未来を担う専門家を育成することは、心理学界や統計学界にとって重要な課題だと考えています。そのため、私としては少しでもこの状況を改善するため、まずは教育面において学生に計量心理学や統計学の魅力を伝え、未来の統計専門家を一人でも多く育てたいと考えております。その際には、計量生物学の人材育成基盤を参考にしつつ、計量心理学でも人材育成のフレームワークのようなものが構築できればよいなあと日々妄想しております。

ここまで、計量生物学の未来に関することには何も触れられておらず恐縮ですが、本原稿執筆時点で、指導している学生のうちの一人が、来年度より製薬企業で医学統計専門家として医薬品開発の世界に進む予定です。私の力不足から計量生物学の未来に貢献できることはそこまで多くありません。しかし、例えば、指導する学生が製薬企業やAROでの生物統計専門家の道に進むことをサポートすることが、一つの貢献方法であると考えております。特に、心理・行動科学や社会科学で学んだ学生が製薬企業やAROで生物統計専門家として働くことは、チャレンジングですが教員としてはそれを支援できることにワクワクしています。ちなみに、そのようにして医学統計学の世界に足を踏み入れた学生が、心理・行動科学や社会科学の分野に舞い戻ってきて、計量心理学と計量生物学の両方の分野に新しい風を吹かせてくれることを密かに期待しています。もちろん、私自身も方法論の研究を続け、計量生物学の発展に少しでも寄与できるように努めてまいりたいと思います。